

人格への思慕

漱石山脈の廣ぼう

小松・博行先生

(舊かなづかひ)

漱石の直接の門下

高知を訪れた長谷川

豊能成氏、音楽學校長

宮豊隆氏、法政大學長

寺田寅彦氏など第一級の

美しくも羨ましい師弟

關係を、日本でも(?)恐ら

くは「空前絶後のもの」と

言つてゐる。今は亡き寺田

寅彦を始め、現存の阿部

郎、安倍能成、小宮豊隆、

和辻哲郎の四人の碩學、野

上豊一郎、彌生子夫妻、松

根東洋城、鈴木三重吉、芥

川は、断じて許されないであ

り、佛文學の泰斗であ

る。しかし、木村君の益戸

をあげた森田草平を加へて

思ひづくまゝに秩序もなく

列記してさへ、我々は漱石

門下として忽ち十四五人を

隆夫は唯一一人川岸に立つた手を出して芳行の顔を見た

夫に對しての彼の答は微

笑して静かに頭を左右にふ

たのみ。一陣の寒風が川

岸のあしをなでたと思つた

瞬間彼の姿は薩夫の視界から

ら消えて無かつた。あしの

中には芳行の靴がきれいに

ぬぎそろえてあつた。

遠くで隆夫を呼ぶ聲に交つた

声が居た事等興味ある事であ

る。昨年創立以來女生徒を

近く高知を去らんとす

る益戸先生のク或る遺書に

ついてクを讀むと、故木村

久夫君が在學中から如何に

先生を敬慕し信頼してゐた

かと覗はれて、同君の悲惨

なむしろ腹立たしいほどのは

運命に對する憤るしさとは

別に、我々をして何か明る

い氣持にさせるものがある

。先生の、宗教に培はれた

包容力に富む人格が木村君

の心の深奥に潛む純情と觸

織り出された美しい諧和と

心の深奥に潛む純情と觸

織り出された